



そして、長月は瞬く間に進む。

その間にも、春花は数度幹部とともに辰ノ神側と結婚式の段取りを相談にいていた。

そして、多くの反対と賛成の入り混じった声に包まれながら、実際の挙式の日取りも決定し、厳かにその日が近づいて来ていた。

今夜は、その前日の夜である。

明日、春花は夜明け頃には身支度や必要なモノを揃え、式場に向かう。挙式は、獅士堂と辰ノ神がそれぞれ仏道と神道の大きな家柄ということを互いに尊重し、神式、仏式の順に二日に渡り二回行う事になった。

その一回目。神式には、雪絵も参列し祝福することになっている。

春花からそれを切り出された時は、雪絵は厭な顔をしなかった。別段意識して、無理に取り繕った訳でもない。雪絵はこの時も——それはこれまでがあつたからこそだが——これからも、自分と春花の関係と、その繋がり揺るがないのではないかと、と純粹に思っていたのだ。だから、この期に及んで春花と誰かが結ばれることに異を唱える気はなかった。

仁美がその様子を視ていたとしたら、さぞかし彼女の方が表情を崩したことだろう。それが、喜びか何かはともかく。

仁美の方は、参列しないまでも、二日目の式当日は獅士堂邸で組員皆との祝賀会に加わるという事だ。

仁美といえば、先日の屋敷来訪時にもそうだったが、今回の件についてはあっさりしたもので、政略結婚であれ、そうでなかれ、春花の女としての悦びに繋がるという結婚について、大変前向きで喜ばしいという口ぶりだった。そんな仁美がいたから、雪絵も春花の結婚話に対して皆が抱き、口にするような警戒心や不安よりも、『祝福すべき』という気持ちが湧いたのかもしれない。

雪絵は、母の挙式を明日に控えた寝室でそんなことを思う。

寢床で、緩く瞳を閉じている。

「……………」

九月も終わりである。夜の虫の音は、今が盛りとばかりに夜の空気を満たしている。

「……………眠れない」

ぱちりと瞼をあげて、雪絵はつぶやく。

別に虫の音が耳に障ったという訳ではなく、まして腹持ちが空腹を訴えているという訳でもなく、単純に気がおちつかない処があるのだろう。

次いで、身を起こし、襖の外を見遣る。

何気なく、四つん這いで移動し、襖をちらと開けて外の様子を窺う。その日の夜は、穏やかだった。

夕餉の席では、春花の目の前で酒に酔って男泣きする侠たちが、結構な数にのぼり居たが、それは無事に式まで漕ぎ付けた今、何を言ってもこの事態は結果が出るまで覆ることのない事を知ったからだ。

皆も腹をくくったようだ。多分の哀しきや悔しき、そしてまだあるであろう不安を抱えながらも、ここまで来たら静粛に事態の顛末を受け入れる心持ちになっているようだ。

(それは、私もだいたい同じだけれど……、やっぱり気持ちがそわそわしているのかな……)

寝間着襦袢姿で廊下に出る。特に意図があった訳ではない。早く寝なければ、という気持ちもある。しかし、知らず知らずのうちに、手にしている若草色の柄紐の刀が、どうやら彼女の行動を物語っていた。

虚空には、星が瞬いている。下弦の月の頃のように、まだ月は顔を出していない。

ふわりとした風が星々の輝きを映す池の水面を、にわかには揺らしている。

刀の刃が空を斬る音が、断続的に響く。

雪絵の呼吸は乱れない。過重量の鍛錬棒での修練が功を奏し、彼女のフィジカルは以前よりも尚一層、高度なモノに出来上がっている。今や打ち刀での業

は、鋭さを超えて自在で軽やかだ。

自分でその自覚はややあるくらいだが、周囲の侠たちはその成長ぶりに贅辞と嫉妬の様な声をあげる。雪絵はそんな誰かの評価に、興味はほとんどない。雪絵が刀に求めるのは、あの日に魅た華のような『境地』だ。そこに至っていない自らに対しての評価は、焦りこそ生じられても、何かを満たすことはない。

(あの華のような刀を振るえたら.....私もきっと、母さんのように.....)

そうしたら、自分も春花のように、彼女のような武俠になれているのだろうか。

それが、雪絵にとってのこの組での、現時点の最大の関心事だった。

どうしたら、その境地に至れるのか。今の自分には、何が足りず、これから何を追及すればそれを得られるのか。それは、未だ解からない。だがそれは、自分で見つけ出さなければならぬ、と、そう雪絵は知っている。

だから、刀を振るう。振るい続ける。

それが答えに至る道である気がするから。

(けれど、私も随分と色々と考えて、考えながら刀を振るうようになったものよね)

気付ば、心に想いがあふれている。

人と向き合い、命を奪い合う刀技で、それ以外のことでいっぱいなのが、少し不思議で.....しかし、それが何か温かく感じた。

かつては無かった感覚であり――感慨だ。

そんな気持ちで刀を振るえる自分が、そうしたのは、春花という人だったと、雪絵は分かっている。

その瞳に、希望の光が灯る。

黒真珠のように艶のある、活き活きとした彩の瞳が、刀の斬尖を見据える。

「いい業ね。そして、いい瞳になったわ、雪絵」

「！」

不意にかけられた声に、雪絵はそれが春花のモノだと分かって、動きを止め



る。

振り向くと、いつの間に現れたのか、春花が縁側に腰掛けてこちらを視ていた。

その顔には、幸せな微笑みが浮かんでいる。

「母さん……」

「眠れないの？」

「そうねえ。あなたもみたいね」

問いに答える春花の楽しそうな表情に、雪絵はもう一つ訊く。

「なんだか楽しそうな顔をしているけれど、そんなに結婚するのが嬉しいの？」

「ぷっ……何を言っているの、この子は。……まあ、そうね、嬉しくないことはないわね」

「そう……。母さんもようやく、一人の男に落ち着くという訳だ……って、左馬ノ介が組員と話をしたって言っていた」

本当に何を言っているんだか、と春花は少し眉根を寄せて言う。

「あら、誰がそんなことを言っていたのかしら。でも、結構その通りだから、特別に許しちゃう」

刀を鞘に納め、雪絵は縁側の春花の隣に腰かけていた。静かな虫の音と、秋の夜の風が気持ち良い。

「雪絵も色々、何回か男性と付き合うようになったらね、結婚を望む心も分かるようになるかもね」

「そんなモノ？　というか、男を色々乗り換えるのはなんか……どうかなあ、という気もするけれど」

「それは人それぞれであり、あなたもその時々になってみないと解らないかもしれないわよ。もしかしたら、割と気の向くままに新しい異性と付き合ったりということも、あるかもしれないし？」

「何？ それは、視たとでも言うの？」

「ん？ 違うけれど。ただ、女は愛する男一人一人に新しい愛を注ぐの。だから、多くの男を愛したからといって、それが誠実さに欠けるとか、ふしだらとかじゃあ、無い場合もあるということね。女性として、そんな心の在り方もあるんだと、少し知っておいて欲しかったのかな」

「それは、寺崎さんとかと仲良くしていた裏で、結婚相手との仲を深めていたことに対しての、体裁というか、言い訳？」

「うわ?! 雪絵が辛辣だ！ この子はいつからそんなグサリとくることを言うようになったのっ?!」

黒雪だ、黒雪だ、と春花は笑った。

「あ……、でも、別に私、それとかで母さんを責めたいわけじゃあないんだ」

「そう？ 今のながれはあからさまに手痛い責めがくるんだと……挙式前夜に私は愛娘にその結婚をこっぴどく反対されて、涙の結婚式を迎えるはめになるのかと思っちゃった」

二人は隣り合って、互いの顔を見合わせる。雪絵は唇を尖らせて、

「そんな……。母さんの哀しむこと、私はしないよ？」

とじつとりと春花を睨めつける。対して春花も、マネをするように唇を尖らせて言う。

「本当？」

「うん。私、母さんが喜ぶことがしたいと思うから、困らせたり、哀しませたり、そういうのもうしたくない」

私も不安定になるから、と思ったが、そこまでは口にしない雪絵。その辺は、春花も察せられた。

「そう。なんだか、あなたの愛を感じるわねえ」

「ふうん……。愛……。愛ねえ……」

そこで二人は黙り込み、風が緩やかにさわさわと鳴る音がながれる。虫の音が断続的に聴こえる。ややあって、雪絵がつぶやく。

「ねえ、母さん……。本当の愛って、どんなだろう」

その問いに、また春花は「ぷっ」と嘖き出した。

「本当、何を言うのかしらね、この子は……」

「ちよっ……、腹を押さえて笑いをかみ殺さなくてもいいじゃないっ……ちよっと思っただけだよ！」

何が可笑しかったのかが雪絵には皆目見当がつかないが、しかし笑われるようなことだったことに憤慨して、頬を膨らませる。春花からぷいと横を向いてしまう。そんな娘に、春花は手を合わせて謝る。

「ごめんごめん、いや、あなたがそんなことを口にするとは、私も思っていないくてね……、驚いちゃって」

「それは驚いた時のリアクションというヤツなの？」

「でもまあ、人の本当の愛ねっ」

「ながそうとしてる？」

妙に絡みついてくる雪絵に、春花はえい、と手刀で肩を叩いた。そして、こほんと咳をする振りをして、話を続ける。

「人としての本当の愛とはね、そりゃ、人それぞれなんでしょうね」

「それは……よくわからない。もっと『こうだ』というのはないの？」

「あら、雪絵。少し不勉強ね。そこは自分の生で学びとらなくちゃね」

「あ……、そうか」

自内証だ、と雪絵は己の失策を恥じる。

春花と話していると、どうもあれこれ訊いてみたくなる感覚が腹から湧き上がってくる。それは、しょうもないことでも、何でもいいので、兎に角この人と話をしたいという思いかもしれない。雪絵は漠とそう思う。

そんな雪絵の横顔を視て、春花は言う。

彼女も、もしかしたら雪絵と話をする時間を喜んでいるのかもしれない。

「でも、少なくとも刀で成す愛は、あなたも少し分かってきているんじゃないかしら」

「……刀で成す愛？ 男女とか親子の愛じゃあなくて？」

「ええ。太刀合う相手のところを汲み、全力で刀を振るうこと。斬ることを躊躇

躊躇わないところ。相手の気位を尊重し、自らの全力の刀技を尽くすこと。自らの想いと、太刀合う相手の想いを交わす刀で感じること」

「それが、刀で成す愛……」

あれ？ それって……、と雪絵は首を傾げる。

春花は立ち上がり言う。歌うように、軽やかに。自在に。

「雪絵。私は思うわ。刀にこそ、愛がなければならぬと。愛がなければ、刀は破壊的なだけだから。それが、そうして振るわれる刀が、いつかどこかの時で、散った多くの命にも、きっと報いることになる……私はそう学んできたから」

「刀にこそ、愛が必要——……」

そして、春花は座す雪絵に向き、手を差し出した。

「さあ、あなたの刀は……ここまで来た今のあなたの刀は、どんなモノかしら？ 愛が灯るような、そんな彩に少しでも近づけたかしら。見せてみて？ 雪絵」

庭に人影二つ。花托となった蓮が点々と浮かぶ池に、その影が映り、小さな波紋によって交わる。

雪絵と春花は暁月を伏して待つ空の下に、向き合って刀を携えていた。

「あなたと刀を交えるのは、本当のところ久しぶりね」

「そうだね。稽古でもこの二カ月はほとんどなかった」

ふーっ、と二人は息を吐く。

「少し、心が緊張する」

「そうね。雪絵、そんな時は良い倅いの言葉があるわ」

すうと抜刀し、春花は手にした刀を左脇構えで悠然と構える。その佇まいだけで、静謐でそして裂帛の太刀威風を醸し出しているように雪絵には感じられる。

しかし、春花はそれで今の己が不十分であるかのように、瞼を伏せがちにし



て口を開く。

「<sup>はいすい</sup>盃水、静かなればこれモノを映し——乱れ動けばカタチを成さず。己がこころ静かに、身の内に静寂を……」

「それは……」

今の雪絵には、その文言の意味が訊かずとも汲み取れた。

『盃水』とは、眼前の心を満たす盃。水はこころの揺れを顕わす。その水面は、心が乱れると自らの視たいモノを明確に映さず、あらゆる先にある勝利さえ視通すことを困難にする。だからこそ、心を静かにしなければならない。

そうすることで、戦いとそれに向き合う人——互いの様々なことが映り、視える。そのこころで太刀合うために、心に静寂を<sup>もたらす</sup>齎す。

これは戒めであり、心を正しく在らせるための暗示に近い。

暗示はあまりにそれが練り込まれると綻びを生じさせ、効果が薄くなり、やがて意味を成さなくなる。精神に作用する刺激にも、慣れや綻びが生じる。雪絵はそれを自らの身で振り返ることで理解している。だからこれは、いざという時に、身を奮い立たせ、心を静謐にするためのモノだろうと心得た。

「盃水、静かなればこれモノを映し——乱れ動けばカタチを成さず。己がこころ静かに、身の内に静寂を」

雪絵もまた、緩やかに抜刀し静かに刀をおろし、構えその言葉を口にする。

その瞳が、静かに黒く澄んでいく。

「いいわね」

「うん……。でも、血刀じゃあないんだね」

「いいのよ。あなたには私の力で、私のこれまでと、今の刀技で向かい合いたいわ」

「そう？」

そう。と春花は風に<sup>たてがみ</sup>鬣のような髪を揺らしながら、しかし既に構えが斬り込んでくる気配を雪絵に放っていた。

「血刀の未来視はね、血刀が遣い手に付随させるモノだけれど、獅士堂緋蓮となる者は、いずれ自らの視る力を持つことになるの。そういう因果にあるのよ」

「？」

「いいのよ……。いずれ、そのうち分かるわ。あなたにも。だからね、今は私の力であなたと太刀合う」

「……………！」

春花の緋色の瞳が煌めく。

雪絵は、その光に腹の底にずしりと重たいモノを感じる。そして、自らの心に静謐の文言があることを思い起こす。心を整え、静かに保ち、春花の構えと、佇まい、緋色の瞳を視て一一捉えて、柄の握りを改める。

「魅せてごらんなさい、雪絵」

「うん……、はいッ」

そうして、刀を振るう二人。

互いが同時に斬り込んだ。それは遠慮会釈も躊躇いもない太刀だった。

二人の下段脇構え。獅士堂の構えの基本にして最奥“無位の構え”は、後手必殺の太刀——相手の打ち込みの後の先を打つ刀技である。

しかし、この時の雪絵と春花は、互いの刀と気と瞳に吸い寄せられるかのようには身と腕と、全身の気を逆らせて、考えることなく、感じるままに互いの刀を求め打ち込んでいた。待つてなどいられなかったように。

初撃が互いの刀を打ち鳴らし、その火花が辺りの空気を震わせる。一切の虫の音が止み、池の水面に揺れが走っていく。

キインッ！ シャリン!! カアインッ!!

数撃が一刹那に繰り出され、雪絵と春花、互いの全力で、相手を斬り伏せんとする眼光で振るわれる刀が舞う。

数閃——数十閃と空気が裂かれる。

刀が閃いていく。

その刃が互いの刀に触れたその刹那、相手に次の軌道で迫ろうと刀を返し、また相手の刀身を両者が撥ね捌こうとする。

それが、お互いにその拳動を狙って先に先にと繰り返し合うことで、二人の刀閃はめまぐるしく交差し、夜中に煌めき、空で踊り合った。

## 第五章 太刀の四

---

互いに必殺の一撃——決定打となる業を放つのを待ち、冴え冴えとした一太刀の応酬を続けているのだ。

辺りには、キンキンキンツ!! という力強く甲高い金属の衝波が音と熱気となって拡がり、二人はその渦の中心で刀技の冴えと苛烈さに打ち震え……やがて笑んでいる自分たちを視る。

互いに速くなってきたわね、雪絵。

楽しい。母さんと刀を交えること。

楽しいわね。

うん!

ずっとこうしていたいかのような——刀を振るい、舞うその刹那刹那の、瞬間瞬間のキラメキを、一刻を——この瞬間を永遠にして生きていたいかのような。今こうしていて、つくづく自分たちは刀に生きる修羅だと思う。人を斬る利器で舞うことを、こうも楽しむ修羅。

身気と心と、刀が一致した一秒一秒よりもなお短く濃い時を、二人は噛みしめる。その間も、二人の読み合いの連撃は逆巻き、太刀風を昂ぶらせ、やむことはない。

ぶっ倒れるまでこうしていたいな。

——けれど。

二人は気を強める。更に、これまでよりも鋭く業が舞う。そして互いが互いの手の内の、癖ともいえないほんの僅かな撓みに対し、的確に、そして渾身の一撃を放つ。

刀が舞い閃き——互いの身を裂く。

……刀は、その直前で、雪絵たち双方の首の皮まで残り1ミリに満たないところで止まっていた。

相討ちの体だった。

雪絵は思う。

## 第五章 太刀の四

---

自分の刀が、今もまだ春花を超えていないことに、安堵とも、物足りなさともいえぬ心になる自分が、心地いいと。

春花は思う。

子の成長はめざましく、教えることに果ては無くとも、ここに至り、ひとつの結実は確かめられたと。そう、満足を胸に感じた。

互いに刀をおろし、そして、視線を交差し合う。

「ぷっ」

「ふふっ」

あはははははっ——と二人は声を上げて笑った。

共有した時間を尊び、喜び、そして同時に惜しみ、余韻に浸る。そんな互いの心が手に取るように分かった。

そんな奇妙がこの上なく可笑しく、何度でも感じたいと思うくらいに嬉しく、楽しかった。

雪絵と春花は、刀で心の会話を果たしたと感じた。

「上出来ね。血刀を遣わない私と相打てる腕ならば、申し分ないわ」

「そう？ でも、まだまだ修練が足りないと思う」

「ふふ。頼もしいわね」

さわさわと、秋の夜の風が二人の熱く火照った肌を撫でていく。

春花は、刀を鞘に納めると、傍らの雪絵を見遣り、静かに笑った。

「雪絵、私は結婚するけれど、あなたの母であることに変わりはない。私はこれからも、あなたの心に在り続けるわ」

「……………うん」

そう応えて、何の疑問もなく、半ば幸せな想いを胸に、夜を静かに眠り伏し、過ごす。

そして、夜明けとともに、結婚式の日が始まる。

……続く。